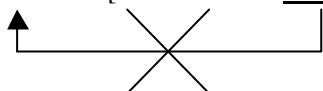


- 仮説:

例5と同様、英語では例8のような文は不可能である。したがって、もし Akiyama (1999) の予測が正しければ、日本人英語学習者は例9の場合 himself が John を指すとは解釈しないはずである(例5 & 7 の関係を参照)。

(8) *John told to shave himself.

(9) John told [Tom to shave himself].



もしこれが事実なら、日本人英語学習者は、定形・非定形といった特徴よりも、動詞のタイプ別によって再帰代名詞の先行詞の解釈を決定している可能性がある。しかしながら、Akiyama (1999) も含め、以上の仮説を支持(もしくは否定)するための実証研究はまだない。Matsumura (1994) に類似の現象が見られるが、もともと実験計画に組み込まれていなかったため、データも少ない。

実験:

- 被験者: 米国ハワイ州の語学学校で英語を学習する成人日本語母語話者40名(男7名女33名)。平均年齢: 27.10歳(18 - 49歳)。
- テスト: 文脈付の文法性判断タスク(実験文が、文脈と同様のことを述べているかどうかを判断する)。LD binding がふさわしいような文脈を与え、被験者が英語の規則通りに LD binding を否定できるかを調査した。

< 例 >

文脈: タロウはハナコのが好きですが、彼は恥ずかしがり屋なのでまだ彼女と話をしたことがありません。タロウの友達タカシはハナコと同じクラスなので、彼の計らいである日3人は一緒に食事に出かけることになりました。3人はあるレストランにやってきましたが、タカシはさっきからハナコに向かって昨日見たテレビドラマのことばかり話していて、ちっともタロウが話題にのぼりません。ハナコがトイレに立った際に、タロウはタカシに「ちゃんと僕のこと話してくれよ。」と言いました。

実験文: Taro told Takashi to talk about himself. Yes. / No.

2つの動詞タイプ:

want タイプ: want, wish, (would) like, (would) prefer

tell タイプ: tell, ask, persuade, order

- データ分析:

被験者は上の8つの動詞に対してそれぞれ1つずつの文脈と実験文を与えられた。LD binding をきちんと否定できた場合(上の例で No と答えた場合)に1点が与えられた。満点は、それぞれの動詞タイプについて4点ずつ。

• 実験仮説:

tell タイプの動詞を含む実験文 (*tell-type sentences*) の平均点は, want タイプの動詞を含む実験文 (*want-type sentences*) の平均点より有意に高い。

結果:

表 1 . 動詞タイプ別平均点と標準偏差 ($n = 21$)

Sentence Type	<i>k</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
<i>want-type</i>	4.00	1.19	1.12
<i>tell-type</i>	4.00	1.95	0.80

被験者間計画 *t* 検定の結果: $t(20) = 2.685, p = .014$

考察:

- 仮説の通り, 日本語を母語とする成人英語学習者は, 例 4 & 6 のようにインプットの誤った分析に基づいて再帰代名詞の先行詞を決定している可能性がある。
- 母語の規則の転移や, 抽象的な統語規則ではなく, インプット中の個々の例をもとにボトムアップ的な習得プロセスを経ている可能性がある。

引用文献:

- Akiyama, Y. (1999). *Japanese adult learners' development of the locality condition on English reflexives*. Unpublished manuscript, University of Hawai'i at Manoa, Honolulu.
- Broselow, E., & Finer, D. (1991). Parameter setting in second language phonology and syntax. *Second Language Research*, 7, 25-59.
- Cook, V. J. (1990). Timed comprehension of binding in advanced L2 learners of English. *Language Learning*, 40, 557-599.
- Finer, D. L. (1991). Binding parameters in second language acquisition. In L. Eubank (Ed.), *Point counterpoint: Universal Grammar in the second language* (pp. 351-373). Amsterdam: John Benjamins.
- Finer, D. L., & Broselow, E. (1986). Second language acquisition of reflexive binding. *Proceedings of the North Eastern Linguistics Society*, 16, 154-168.
- Hirakawa, M. (1990). A study of the L2 acquisition of English reflexives. *Second Language Research*, 6, 60-85.
- Matsumura, M. (1994). Japanese learners: acquisition of the locality requirement of English reflexives. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 19-42.
- Wakabayashi, S. (1996). The nature of interlanguage: SLA of English reflexives. *Second Language Research*, 12, 266-303.

このハンドアウトは, インターネット上でも入手可能です。

<<http://www2.hawaii.edu/~urano/research/chubu2000/handout.pdf>>

(閲覧には Adobe Acrobat Reader 4.0 をご利用ください。)